

## 大膳神社と能舞台

市街地の南側、風情ある神社の裏手にひっそりと佇む茅葺き屋根の建物は、佐渡で現存する最も古い能舞台である。舞台は 1846 年に建てられたが、能は 1823 年からこの場所で上演されており、現在も毎年上演されている。6 月初旬には薪能（たきぎのう）と呼ばれる伝統的な能が、神社で行われる。舞台の後方には松の木が描かれているのが定番だが、太陽を表す赤い円盤が加えられているのが大膳神社の特徴だ。

大膳神社の舞台は、敷地の大きさに合わせて改造されており、一般的な舞台よりやや小さく、5.5メートル四方である。その結果、舞台のレイアウトもコンパクトで、一般的な劇場では、役者の出入りは、舞台と独立した楽屋を結ぶ長い橋掛かりによって行われる。橋は舞台の一部であると同時に舞台から切り離されており、それぞれの俳優の出入りは演技の重要な部分となる。通常、この橋は長くまっすぐなのだが、ここでは二重になっており、楽屋は舞台の真後ろにある。

大膳神社は食べ物と豊作の神である御食津大神（みけつのおおかみ）を祀っている。副社殿には、1330 年代に激しい政治的陰謀に加担した罪で処刑された山伏大膳坊の霊が祀られている。大膳坊は、京都の朝臣が佐渡の島守を殺害しようとして逃亡するのを助けたと言われている。大膳坊の怒った霊をなだめるために、家督の子孫が神社を建てるよう命じた。

## 能楽師の島

佐渡には能が深く根付いている。能楽の創始者の一人である世阿弥元清（1363-1443 年頃）は、1434 年に将軍と換気を受けてこの島に流された。しかし、世阿弥は芸を広めることなく島を去り、能が地元において爆発的に人気になったのは 1600 年代初頭のことだった。1604 年、演劇の素養のある奉行が、金銀の採掘を監督するために島に派遣された。彼は舞台を建て、本土から役者や音楽家の一座を連れてきて上演させた。わずか数年で、能は地域の娯楽となった。わずか十数世帯の小さな集落でさえ、独自の舞台や素人による座もあったと記録されている。最盛期には、佐渡の 200 以上の劇場で能が上演され、能舞台のほとんどは神社に付属していた。そのうちの 34 の場所が現在も残っている。